又日本人間に於ては、交際の間に相手の年齢を平氣で尋ねる人が少くないのであるが、婦人に對しては斷じて斯の如き言葉を出してはならぬのである。婦人に向つて他の婦人の美貌を語ることが侮辱なるが如く、年齢を質問するといふことは婦人に對する大なる侮辱となるものである。又婦人は一般に男子に比して襟度の狹いものであるから、如何なる場合でも婦人を驚かしめ、或は失望せしめ、又は怨恨を發せしむるやうな言語擧動は一切之を避けなければならぬ。何人に對しても温和親切を第一とするは勿論であるが、婦人に對してに特に此の温和親切を旨として、假りにも組擧の言行があつては不可なるものである。

又婦人の爲したる所に就ては、僅かなる特點といへども其の長所を擧げて之を稱揚するは、婦人に對して好き印象を與ふる基である。殊に愛情に富むは婦人の特性で、我が子を

大切にする心は特に深いものであるから、我が子を非常に稱揚して吳れる人とか、或は好意を表する人には、非常に感謝の念を發し、自分に對すると同樣の念を發するものである。小兒を有する婦人に對して小兒を愛するは、婦人に對する敬意を表する所以たるのみならず、愛嬌を呈する基であると思ふ。

▲婦人に共通の最大特質

又婦人は概して嫉妬心の强いものである。固より個人の性格にも依つて一樣ならぬが、大體此の如きものゆえ常に此の點に就ては注意せねばならぬ。されば婦人の前に於て他の婦人の美貌なり他の婦人の優秀なる才能技藝等に就て之を稱揚することは、其の婦人をして、惡感を起さしむる基である。又戯れにも婦人の面前に於ては卑猥に渡る言語行動は絶對に之を愼まなければいけない。又過去に於ける婦人と自分との關係の如きを述ぶるが如

きことは、大に忌避すべきことであると思ふ。是は男子たるもの丶最も慎しむべきことである。

次に婦人といふものは從順にして優婉の氣質を有して居るものであるから、婦人に對しては常に叮嚀親切を盡すべきは必要なる事ではあるが、男子は男子としての性格を失ふことなきやうに努めなければいけない。婦人に對しては男子は男子らしく男性的の特徴を發揮しなければいけない。然かしながら、是れ必ずしも粗暴や剛愎の心を表せよとのことではない。快活の中にも優婉の態度を示すのが大切であるといふのに過ぎぬ。

優婉從順なるは婦人の性質であるけれども、さればとて、男子にして女性的に優柔なるべしといふのではない。却つて男子は男子らしく活潑なる性格の發露を必要とするものである。婦人の男子らしくあるものは感服し難き如く、男子にして婦女らしくあるのは婦人

の感服する所ではない。元來男子は男子らしくあるのが本性であるから、眼識ある婦人は斯の如き女性的の男子の行動言語を以て潔しとはしないものであることを知らなければならぬ。

更に男子として婦人に對する道に於て注意すべきことは、些々たる原因から時に或は婦人と爭をなすが如きことがないとも限らぬが、斯かる場合に遭遇しても、男子は一歩譲つて婦人に勝利を與へて置くのが好い。一歩を譲るは必ずしも自己が敗北したるものではない。若し一歩譲るのは敗北したと思惟するものがあらば、それこそ見解の足らざるものである。明らさまに口舌の上に於て婦人を屈服することは、婦人の自尊心を傷けるものである、婦人は殊に自尊心を失ふことを恐れるものである。

▲薔薇の花には棘がある

婦人は執念の深いものが多い。殊に品性の卑しい婦人にありては、僅かの口舌の爭にても自尊心を傷つけられたりと見るや否や、非常に侮辱せられたるもの、如くに思ひ、容易に其の憎悪の念を忘るゝことなく、寧ろ憎悪の念を深ふし、何時かは其の怨を晴らし吳れんと復讐心を起すものである。此の點に於ては婦人は外觀の優しきに似ず、甚だ頑强なるものである。斯の如き執着心の强い婦女に對して應對交際するの道は、先づ一歩を彼女に讓るのが最も策の得たるものである。俗に負けるは勝つといふことがあるが、斯の如くすることは最後の勝利を奏する所以にして、又婦人の自尊心を重んじ、婦人に花を持たせるといふ最も賢明なる方法であると信ずる。

一概に婦人といつても、幾多の性格を有するものであるから。勿論一定することは出來ないが、然かし淑德ある婦人と交際することは、青年男子として利益あるものである。其

の氣高い言語容姿に接し、親切優雅なる感化を受くることは、粗野なる男子の風を化して優雅輕快なるものと爲さしめ、男子の心に精神的に一種の優良な感化を與ふるものである。左りながら如何なる婦人と交際する上に於ても、以上に於て述べたる條件を理解服膺して、擧止動作の沈着を保つやうに努めなければいけない。

さて上に述べたる婦人に對する交際應對の道は、極めて緊要なるものであるから、常に此の觀念を忘れずして婦人に對して應接したらば、蓋し大過なきに近しと信じて疑はざるものである。勿論婦人の性格は從順にして優婉なることは既に述べた如くであるから。男子として婦人に對するには、此の點に注意して叮嚀親切なる行爲を以て滿足を與ふるやうに努むべきである。

▲女は男らしき男を好む

然かし前にも述べた如く、男子は男子としての性格を失ふことなく、女々しき行爲言動を試みてはならぬ。斯の如きは婦人に好印象を與へざるは勿論のこと、反つて不快の念を起さしむる基となる。此點は特に交際の道として、心得て置かなければ、一旦婦人に惡感を抱かせると、折角の努力も水泡に歸するのみならず、却つて禍害を蒙るといふ羽目に陷り易いから、男子は宜しく男子らしくする方が、婦人に對する道であり、且つ又同時に婦人に對して好感情を與ふる所以である。

▲女には花を持たせよ

元來この婦人に對して敬意を表するといふことは、西洋の中世紀に於ける武士的の觀念に起因するものと信ぜられて居る。而かして之が今日にまで及んで遂に婦人には一歩を讓つて花を持たせるといふ傾向を生じ、又婦人の社會的地位を確立するやうになつたものであると思ふ。是れ武士的觀念の發露として、强を挫き弱を助くるといふ精神に依れるものなるは勿論である。故に此の美しき精神を以て婦人に應接するの心となすことは、婦人の心を捉ふべき最捷徑で、亦正に男子として努むべき道である。

我が國に於ては從來斯の如き意味に於て婦人を尊重するの風は少なかつた樣に思はれるけれども、西洋に於ては婦人に敬意を表することは普通のことゝなつて居る。固より歐米の風習を直に取つて以て我が國に移植するといふことは、場合に因て贊同することは出來ないが、少くとも時代の進歩に伴ひ世運と共に推移することの必要ある以上は、何時までも舊來の風習に倣ふ能はず、又以上述べたる婦人との交際法の如きは、儒教的精神のみを守ることは不可能であるから、時代の進歩に應じて、相當の改善を試み、婦人に對して相當の敬意を拂ひ同情を寄するのは、今日の交際上に於て最も必要と認められて居る。これ

數育ある紳士の爲すべき道であり、青年諸君の世に處するに就て心得置くことも此の點にあると思ふ。斯くして多數の人と交り、且つ世上の實際に適する交際の道も次第に學び得られるのである。

第十一章　服裝と身體の修飾

▲交際と儀客の整理

風采を整へ服裝に注意を拂ふのは、所謂邊幅を飾るもので、其の心事の小なるを示すものであるといふ人がある。維新前の志士の中には斯の如き人が極めて多かつた。又實際武家時代の偉人豪傑の如きは粗服を纏ひ弊衣を着して少しも顧みず甚だ無頓着に構へ、世間の人も是れは武士の習ひであると見做して深く顧ることなく、當然のことと、考へて居た。

然かしながら斯かる思想と斯かる體裁とは、今日の世の中に於ては其のまゝ之を適用することは出來ない。

言ふまでもなく今日は平和秩序を重んずる世の中である、秩序ある文明時代である。故に今日の時代に處する人は、相當の服裝をなし、相當の儀容を整へて、人に接するのが即ち禮儀である。然かるに不潔な粗末な體裁をして、人に接する時は、爲めに其の人の人品までも疑はれるやうになり易い。勿論人間の眞價は外形上の服裝風采にあらずして、實力と技倆とに基かねばならぬのはいふまでもない。

然かしながら、相當の實力あり技倆ある人にして、更に服裝風采まで整然として居たならば、一層その品位と價値を增すことになるものである。『大行は細瑾を顧みず、大禮は小讓を辭せず』とは、支那人の言であるが、是れは戰國時代の英雄豪傑の心事をいふので、

今の世に於てはとても、採つて以て範とするに足らないのである。如何となれば、前にも述べた如く、今日は秩序を重んずる時代である。如何に簡易生活の人であつても儀容を無視することは出來ないのである。若し儀容を無視するに於ては、人に對して禮儀を缺くことになるのである。

然かるに弊衣粗服を着して他人と交際し、多數の人の出入する場所に行くのに十人並の服裝もせずして行くと、世間からは一風變つた人のやうに誤解せられ、不利を蒙ることが少くないのである。苟くも人に接するものは、吾人の注意を待つまでもなく如上の要件を心得て居ること、思ふが、學校出身者の如きは未だ實社會に出で、日淺きを以て知らぬものもあるから、茲に少しく注意を述べて見やう。

▲花も實もある眞の武士

昔亂世の時代に於ては一般の氣風は殺伐で、多くは戰爭に從事して兵馬の間に出入して居たのであるから、服裝等に注意するとか儀容を整へるとかいふものは少なかつたのである。然かしながら用意周到にして思慮ある人は、武士といへども儀容を整へることを無視しなかつたものである。

清水宗治は備中高松城主で毛利元就の重臣であつた。天正三年六月三日のことである。秀吉が大軍を率ゐて高松城を水攻めにして陷れんとし、一方にては使者を派遣して降伏を勸めたから、宗治は斷然切腹を覺悟して、其の代りに將卒一同の命を助けられんことを求めた。

最早や明日は切腹するといふ時に、儀容を正しく整へて居た。是れを見たる知人等は其の態度を見て笑ひ『君は明日にも切腹しやうといふ日に、髮を梳り儀容を整へて、邊幅を

飾るとは其の意を得ない』と言ふと、宗治は容を改めて『イヤ〳〵死後に見苦しき體裁をしたといふのが知れたらば、自分の體面に關するから、思ふ所あつて儀容を整へて、人から笑を招かぬやうにと覺悟するのである』と答へた。

又木村重成は關東軍と奮戰して茶臼山に戰死したが、其の時木村の戰死を聞いた關東軍は其首を探し求めたが、却々發見せなかつた。段々と取調べて見ると、重成の顏を熟知するものがあつたので遂に發見して、其の首を家康の前に差出した。見ると毛髮は梳つて美しく整ひ、又毛髮の間には香を焚き入れたものと見えて芳しい香を放つて居た。是を見た家康は感服して『さても惜しむべき武士を失つたものである。死生の間にあつても斯くまで用意周到であるとは、普通人の及ぶ所にあらず』と言つて、大に之を惜んだといふことである。

昔の武士といへども思慮あるものは、死生の間にあつても體面を保つため儀容を整へたものである。況して今日は秩序を尙び常識を重んずる世の中であるから、戰國時代とは大に其の趣を異にするのである。されば不體裁の服裝を以て人に交はるのは、相手に對して禮を失ひ、惡感を與へ易いものである。勿論識者の目から見るならば、服裝の如きは敢て顧るの必要はないと思はれるかも知れないが、社會の大部分の人は普通の人であるから、相當の服裝體裁をして相當の儀容を整へて居なければ損である。

▲分に過ぐれば奢侈となる

服裝を整へるといつても、何も奢侈贅澤をせとか、或は身分不相應に邊幅を飾つて、世間の人を驚かすべしとの意味ではない。自己の身分相應の服裝をせねばならぬといふまでのことである。卽ち時と所と場合に應じて相當の服裝を必要とするので、今日の如き物價

騰貴の際には耐え得るものにあらずといふものがあるかも知れないが、各人の生活程度に應じて準備すればよいのである。必ずしも美服して體裁を裝ふの必要はない。勅任官は勅任官に相當し、判任官は判任官に相當し、職工は職工に相當し、學生は學生に相當する服裝をすればよいのであつて、分限を超えてまで修飾するには及ばぬのである。

服裝に注意する第一要件は清潔を重んずることである。汚れたる絹布よりも、清潔なる綿布で折目の正しいものが、反つて他人に好い感じを與へるものである。衣服の優劣といふよりも清潔不清潔が注意を要する問題である。

又洋服の場合にありては、カラカフス或はネクタイ、靴の如きは眼につき易いものであつて、不潔なものは如何にもダラしのない事を證明するものである。殊に白色の部分に汚點のあるのは見苦しいもので、十分に洗滌して常に清潔を保たなければならぬ。洋服は平

生手入れさへ丁寧にして置けば、新調のものでなくとも、折目正しいものを着用することが出來るものである、之に反して脱き去つても、丸めて投げて置けば、イザといふ時に皺だらけで間に合はないから平坐の心懸けが肝要である。

尚又ネクタイの如きは最も人目に付き易いもので、殊に夏期用のものは、常に汗で汚れ易いから、大に注意して清潔を保たなければいけない。さて汚れた場合に揮發油を用ゐて汚點を拭ひ去れば清潔になつて居る。決して汚れたる儘にて用ゐてはならぬ、ネクタイの不潔なのは、人の目に不快の念を起さしめ易いのである。又靴に至つても能くブラシをあて靴墨を塗り、泥の着いたまゝに捨て置くことなく、常に磨いて置くことが必要である。斯の如く手入れを十分にすれば何時でも立派な體裁を保つことが出來るのである。然かるに面倒と思つて放任して置くから泥土が附着して見苦しいのである、殊に不潔なる靴を穿

いて西洋館に出入する時は、是が爲めに室内に敷き詰めたる絨氈を汚すから不行儀となる以上の如きことは日常同斷なく起ることであるから多數の人と交際して行くには日頃から注意して失敗の無いやうにせねばならぬ。

▲蓬頭垢面は時代の禁物

以上は服裝に對する清潔上の注意であるが、是と同時に亦身體の清潔も忘れてはならないのである。此の身體の清潔といふことは禮儀の上よりのみならず衛生上からいつても、是非とも守らなければならぬ。乃ち毛髮の如きも相當の時日には理髮店に行つて、其の伸びたる鬚髯を整へなければならぬ。又毎朝毛髮を梳るだけの勞を惜んではいけない、又齒牙は最も人の眼に着き易い部分であるから、毎日十分に磨いて不潔ならぬやうに注意しなければならぬ。齒牙の不潔で惡臭を放つは他人に不快の感を催さしむること甚しいも

のである、又斯の如き身體上の不潔といふことは外見上見苦しきのみならず、健康上にも良からぬ影響があるから、尚更注意を要する次第である。

又飲酒の習慣ある人は、兎角、口中に酒氣を帶びて、相手に不快の感を與ふるものであるから、飲酒の後、時間を經過せずして人に接する場合は、酒氣紛々として不快の念を與ふるもので、宴會の時は兎も角、普通の場合にありては禮儀に叶つたことではない。更に又注意を要すべきことは、單に毛髮齒牙のみにあらず、身體の各部を清潔にしなければいけない、殊に夏期にありては少し入浴を怠る時は、是がために汗と混合して惡臭を放ち、自己に接近する人に對して非常に不快な感を與ふるものである。毎日入浴せざるまでも汗の附着せる部分は十分清潔に拭掃して清潔を保つやうにせねばならぬ又着用の衣服も汗にまみれると、惡臭を放つから屢々洗濯して用ひぬと、相手に不快感を起さしむるは言ふま

でもないことである。

斯の如きことは誰にも解り切つたことで、交際の道を説くに就て左まで必要でないと思ふ人があるかも知れないが、決して然らず、多數の人の間に出入するものは服裝の清潔のみを考へて、身體の不潔を等閑に附する人が少くないやうであるから、是に對する注意を述べて置くことは必ずしも無用のことではあるまいと信ずる。

▲外國に於ける服裝上の制裁

日本に於ては服裝に就ての社會的制裁が嚴重でない。尤も儀式等の場合には一定の服裝をするのであるが、集會又は他人を訪問する場合、或は他の場合に於ては往々にして以上の要則に戻ることが少くないのである。之に反して歐米各國の如きにあつては、却々嚴重で、服裝の亂れたるものは全然人が相手にしないのである。さればホテルのボーイでも服

裝に注意する、旅客にしても服裝の亂暴なものは宿泊を拒絶する場合が少くないのである。

又汽船の食堂に在りては相當の制裁を設けてあるから、相當の儀容を整へた人でなければ紳士淑女を食卓と共にすることが出來ない事になつて居る。左れば日本人のやうに浴衣がけで酒場に飛び込んで飲食するといふやうに簡單には行かぬのである。自分の費用で自分の衣服で飲食するのに敢て差支はないやうに思ふが、斯かる食堂にありては紳士淑女が儀容を整へて集るのであるから、自分一人の異樣の風采は多數の人に惡感を與へ易い、從つて儀容を整へぬものは自分の室で食事をせねばならぬのである。斯の如く、外國人は極めて服裝に就ては嚴重である。

さて我が國にありても今日は從前と大分趣を異にして來たのであるから、服裝上、餘

りに無頓着にして不體裁の人は、社會の人から指彈せらるゝやうになつて來た。例へば餘りに不體裁な服裝をして居ると、『何といふ體裁の人』とか『實に不體裁の奴』などゝいつて、一寸見ただけで直に擯斥せらるゝ場合が少くないのである。勿論言語應對に注意することは必要であるが之と同時に服裝に對する注意も決して沒却することは出來ないことを心得て置くがよい。

固より服裝を整へるといつても、華美な儀容を整へ或は身分不相應の衣服を着するとこは、反つて輕薄なる感を起さしむるもので、決して贊成することは出來ぬ。服裝に注意するといふことは必ずしも外見を裝ふに汲々せよといふ譯ではなく、何等邊幅を飾るためにするものでないことは、讀者の十分之を理解した所であらうと思はれる。不潔なる服裝は他人に對して禮を缺くと共に非常に不快の念を起さしむるものであつて、人と交はり、世

に處する以上、其の不利益を被むる場合の多いことは甚だ少なくないのである。

▲準備は日頃の心懸け

上述の如く固より服裝は徒らに邊幅を飾ることを目的とするものではないから、多くの準備は之を要せぬのであるが、普通の禮式用に必要な、夏冬に用ふる羽織、袴、洋服ならばフロック、コート位の準備があれば十分である。社會に立つ以上、是れ位の用意は何人にも缺くべからざるものである、人事の多端なる何時如何なる場合に集會とか、或は冠婚葬祭に列し、或は貴人を訪問せねばならぬ時が起つて來るか知れない、それ丈けの用意がないと斯かる場合に於て見苦しい體裁で出掛るやうになる。

又冠婚葬祭の如き嚴肅なる場所へ禮服を着用せずして出入する事は、勿論禮を缺くのであるから、服裝の整はぬために出席を中止するやうになり易い、是がために折角の弔悔

祝賀の意を表することすら出來なくなつて、非常に差支を生じて來るのは當然のことである。然かし是れ位の服裝の用意は少し注意すれば誰にでも出來ないことではない。大抵の人ならば出來るのである、又衣服の保存法に注意さへして置けば、一度調製して置くと長く使用に耐えるものであるから、何人も以上の準備が整ましいのである。

以上服裝に關する事項は主として男子に就て述べたものであるが、女子に於ても勿論注意しなければならぬ、否女子にありては男子よりも尙一層注意しなければならぬ。婦人は殊に容貌に注意し之がために時間を費し、金錢を要することの大なるものである。固より貧困なる家庭の婦人は、斯の如きことすら出來ぬであらうが、中流以上の子女になると、服裝容貌の點に注意せぬものは殆どないのである、されば服裝儀容に關する用意も、女子にありては男子以上に出づべきは當然である、是とても身分不相應の體裁をせよといふの

ではない、矢張り自分の身分に相當したものであれば足れるので其れ以上に出づることは奢侈贅澤と認め、寧ろ戒むべきことである。

尙又服裝に就て最も注意すべきことは、上來已に反覆して述べたる如く、清潔といふことが第一である、品質の如きは第二である、根本的條件は他人の眼に映じて突飛的にならぬやうにすることである。又不快の念を與へぬやうにすることが大切なることである。則ち男女何れを問はず色彩の著しく華美にして眼立つものは好ましからぬことである、其模樣柄合の撰定は各人の常識に一任すれば良いのである、交際上に於て他人に接觸する機會の多いものは服裝上に於ても他人の指彈を受け失策を演ぬやうに心がけるのが、大切であるが、併し之と同時に吾人の本旨を履き違へて無用の贅澤は嚴に避けなければならぬ。

第十二章　交際に必要なる諸遊藝

▲仲を取り持つ好媒介

吾人が人と交はるのは、多くは日常必要の事務を處する上から、接觸して懇親を結ぶ場合が多いのであるが。然かし又其の他の場合に於て偶然に懇親を結ぶやうな機會も少くない、例へば旅行中の汽車とか汽船の中に於て同乘し、或は同一の旅館に宿泊するといふことが、不圖交際を結ぶ緣故となることもある。斯の如きことは日常に於て能く起り易いことであるのは何人も能く承知して居ることである。又斯の如き場合の外に、同一の遊藝に趣味を有する關係から、互に懇親を結ぶやうになることも多い。

殊に遊藝に於ては甲乙兩人は或る時間中、互に膝を交へて接するから、他の場合よりも

一層親密になるのは當然の順序で、世上に屢々見受くることである。又同じく遊戯の類にも種々の別があつて野球、庭球の如きより、球突、圍碁、將棋を初め、書畫、骨董、詩歌俳諧及び管絃の如き、或は又茶の湯の如きに至るまで、何れも趣味を同じうする人に於ては、親密の交をする動機となり易い。

勿論各人各樣で趣味の點も亦異り遊藝は好まぬといふ人もあるから、一概に心得て居るといふ譯には行かぬ、又遊藝にしても種々あるのである。實際に於て、遊藝は必ずしも必要とはいはれぬにしても、之を心得て居る方が交際遙かに都合がよいに違いない、然かしながら遊藝にしても人は萬能といふ譯には行かぬから、各自の趣味と嗜好とに應じて圍碁を好むものは圍碁、將棋を好むものは將棋、テニスを好むものはテニス、和歌俳諧を好むものは和歌俳諧、琴曲を好む人は琴曲といふ風に、其れ〳〵自己の

好む所に從つて趣味を追ふから、一通り此の方面にも通ずる方が社交上に於て好ましきことである。

然かし右に述べた中で、高尚にして且つ又興味の多いと思はれるものは、主として圍碁、將棋、球突等ではあるまいかと思はれる、殊に圍碁の如きは心血を注いで盤上で智力上の戰爭をするのであるから、非常に興味のあることであると思ふ、且つ又一方に於ては人と差向ひて互に輸贏を爭ふから、懇親になる上から言つても適當なるものと言はねばならぬ。

▲碁、將棋、球突、歌、俳句

されば人は多少の餘裕のある時に、茫然として時を徒費するよりも、退屈を凌ぐのために友人とか知人を相手に圍碁を試むるといふことは娯樂となるのみならず廣く人に接する

機會を見出すべき好個の方法であると言はねばならぬ、殊に圍碁は互に局に對するのであるから懇親の度も一層大にして、交際上の道具としても之を心得て置くことは、大なる利益のあるのである。

吉田兼好法師は其の『徒然草』に於て、圍碁は時間を潰すものでつまらぬといふやうに述べて居る、如何にも圍碁に熱中して、多忙の時間を犧牲に供し、折角の好機を逸するが如きことあつては、不可なるもの、且つ不經濟的の次第なるはいふまでもない、固より他の方面の遊戯であつても時間を費すことは同じことである。併し人は如何に多忙な身であるからといつても、全く餘暇を有せぬといふ筈はないから、無聊に苦しむが如き餘暇を利用して圍碁の如きを試みることは、精神を愉快にするのみならず、交際を結ぶ上に於ても好都合な方便である。

固より之に耽つては、自己の業務をも閑却することになるから、何事によらず程度を越えた遊戯は不可である。飲食は毎日缺く可からざるものであるけれども、程度を過すと反つて健康を害するものである。總ての遊戯も之と同一のことで、餘り之に耽つて急務を忘却すると、業務の妨げとなるから不賛成である、併し閑暇のある時に、懇親なる友人と相會して、交情を温むる方法としては決して悪いことではあるまい。

又和歌の如きは學問といへば學問であるが、實は文字上の遊戯ともいふべきものである、各人の思想を文字の上に表示して樂むものであるから、決して實用的の文字とはいはれぬ。それにしても餘裕のある時、斯の如き高尚なる思想を表示する方法を涵養し詩歌の上に無聊を慰め、或は之に依て交友を求むるが如きは確かに人生の快事とするに足るもので、一通りは之を心得て置くのは決して悪いことではない。

▲先帝陛下と國風

明治天皇は我が國に於ける最大の歌人の一人でおはせられた、其の御製の數は實に數萬の多きに達して居ると承つて居る、何れも咳唾珠玉を爲すといふ次第で、全國に響なきはなしである、當時の御歌所の長官たる高崎正風男は、先帝に奉仕して御諫言申し上げた言葉に、『和歌は御政事に御差支のない時に御作りあらんことを御願いたします、和歌のために御政務を妨げることは、望ましからぬこと、存じ奉る』と言上したから、陛下には能く此の諫言を入れさせ給ふて、御政務の餘暇にのみ、時に觸れ機に應じて和歌を御詠みになつたと聞き及んで居る。

それ故に一般の人に於ても、各自の事情の許す場合に、或は詩歌を作て、優美高尚なる思想を文字の上に表はすが如き清き娯樂をなすとか、或は無邪氣な勝負事に興趣を遣るは

時間を愉快に送るの方法として、又廣く人と交際を結ぶ法として、必要なることであるのはいふまでもない。されば何人も適當の遊戯を選擇して適當なる時間に於て之を樂むのは、最も望ましいことである。

▲遊戯と職業の區別

されば數多ある遊戯の中で、圍碁の樂みの如きは、一應の修養を積み置くは決して不可なきことである。然かしながら、圍碁は元來勝負事であるから、之を濫用して賭博の用に供するが如きは、高尚なる遊戯を俗化するもので、誠に卑しむべき行爲である。斯の如くあつては、折角に興味多く上品なる趣味も全く殺風景のものと化して、其の眞價を減殺する甚しきものである、されば如何に勝負に興味を有する人であつても之を濫用して賭博の用に供するが如きことがあつては斷じて排斥せねばならぬ、且つ又斯かることよりして

事端を開くの基を作り易いから、何人も最も注意を要する所である。

次に圍碁に於て甲乙兩人が熱心に對局して居る時に、傍觀者たる者が助言をしたり、或は批評をするが如きは、遊戯上の禮を缺くのみならず、他人が折角興味を以て競技して居るのを妨害し、勝負も面白くなくなるのである、其の結果、相當の理由あつて負けても、助言や批評のためと誤解して、之を怨むものさへも少くないのである。

勿論これ位のことで怒を催すが如きは、實に度量の狹い話であるが、兎角に傍觀者たるものは助言とか批評とかは、なるべく愼むのが禮儀であつて、又交際を圓滿にする上ありと見ても必要なことである又對局者としては傍觀者が多少助言したり批評を加ふるやうなことがあつても、直に立腹して甚しきは其人に喰つて掛かるが如きは、實に下賤な品性を示すものである。勿論人の競技に嘴を入れるといふこと自身が已に惡いのは分明である

が、一々之を咎め立てする時には、多數の人の間に於て到底競技するに耐えなくなるものであるから、多少の批評は助言を受けたとしても、之が爲めに感情を害することなく度量を大きくして、勝敗は自己の技倆に任せるやうにせねばならぬ。

斯の如き襟度を以て人に接すると、人は喜んで自分と競技をして呉れ、又競技のために感情を害することは起らぬから、交際も亦圓滿に行くのである。然るに斯の如き襟度の備らぬ人は、些細のことに感情を害して、果ては人を怨むやうになり、迚も多數の人と交はることは出來なくなる。されば遊戯の間にありても相當の禮儀を守ることを忘れてはならぬ。

又自分が負けたから大に悲しむとか、或は怒氣を帶ぶといふやうなことがあつては遊戯の本領を沒却すると共に、交際の道に反するから愼しまねばならぬ。されば勝敗の結果、

心を苦しめ或は怒を漏らすが如き理由は毫もあるべき筈のものではないが、實際は度量の小さい人には起り易きことで、圓滿の交渉も之がために破ることが起る、是れ幾多の實驗に徵しても明かである、總て遊戯は職業ではなくして文字の示す如く遊び事であるから、其の技術の巧拙の如何は、固より天賦の性質にも依ることであるが、是れも亦勉强次第では技術を熟達せしむることは出來るものである、相當に技倆が出來れば之がために交際も廣くなつて來て、俗にいふ『藝は身を助くる』といふことになる。

左はいへ勝負事に就ても失敗して喜ぶものはあるまいが、併し負けて悲しむの好ましからぬ如く、勝を誇示するやうな態度は好ましくないのである。則ち勝に乘じて技倆を誇るが如きは交際上から見て大に排斥しなければならぬ、誰でも冷評せられると不快に感ずるものである、されば此の點に關しては大に注意しないと、之がために惡感を招き交誼を破

る基となるものである。

▲斯くては却て不和の基

昔豐臣秀吉の弟であつた秀次は、將棋が强かつたが、誰でも掴へて挑戰をしたものである、確か前田利家であつたと思ふが、秀次と將棋を遣つた後に、人に語つて曰く『秀次といふ人は誠に厄介な人である、自分より將棋は少し强かつたが、自分が負ると何だか態々負けたであらうといひ、勝てば非常に誇り、大言壯語して幾度でも遣れといふやうの人であつたから彼と將棋を差すのを好まなくなつた』と話したさうである。

又圍碁のために詰らぬ喧嘩をして不和の原因を作つた例は澤山ある。夫の由井正雪の部下たる丸橋忠彌のことは、已に述べたが、此人のは圍碁も相當に强かつたので、同じく正雪門下の一人の何某と圍碁を戰はして、互に勝敗を爭つて樂んで居たのはよいが、いよ

〳〵大事を企てやうといふ一兩日前のこと、其の人と對局したが、自分の方が危くなつて負けさうになつたので『一寸待つて呉れ』といひ出したが、相手は『待たぬ』といふと『待て』といひ、遂に爭論となつた。忠彌は短氣の人であるから傍の碁石入れを取つて相手の面上に投げつけて負傷せしめた、所が相手も大に怒り侮辱を受けたるを非常に怨んだ、一時は仲裁する人も出來て仲直りしたが、其父なる本鄕弓町に住める弓師某より額上の負傷に就て詰問された結果、遂に正雪一味の陰謀計畫を老中に密告したから、大事の起らざるに先立ち陰謀忽ち暴露して、折角の計畫も水泡に歸し正雪は切腹するに至つた。

圍碁や將棋、遊藝の如き勝負事は娯樂のためであるけれど、之を濫用して、紛爭の具に供し果ては腕力沙汰まで惹起すのは苦々しき次第で、論外のことである。何處までも勝負事は、娯樂のためといふ本領を忘れないで、面白く愉快にやるといふやうにして行けば、

之がために交誼を破らぬのみか、却て交誼を密ならしむるものであるから、時間潰しの遊藝とはいへ、常に這般の呼吸を忘れぬやうにして行くのが大切なことであらうかと思はれる。

交際上手斯の如き人は成功す　終

附錄

觀相秘傳

白雲道士著

一、觀相の基準

人間の心理狀態を解剖するに寔に千種萬態で、似て非なるものがあり、異なりて同じきものありと云つた樣な具合で、容易に其色別をすることは出來ぬ、然らば何を以て觀相の標準とすべきやと云へば骨相學を根據とするのであるが猶進んで易學をも應用して、彼此照合研究せば其人の性情を觀破し得ることは容易である。

骨相學とは原語で『フレノロジー』と稱し希臘語では精神論の意義である、則ち腦蓋骨の形狀(腦髓の發達の大小)其體質の如何に基きて其人の性狀を觀破する學問であるが、こは

西歴千七百五十七年日耳曼に生れた『ドクトル、ジュセップゴール』と云ふ醫師が發明したもので、爾來益々之を研究して米國のフフウラー及びネルソンサイザー諸氏に依つて今日の如き人間社會に要用の學問なるを知らしめ、大なる實用的の程度迄進歩したものである。

ドクトル、ジュセップゴール氏が發見せし其原由を尋ぬるに、彼れの少年時代矢張校友の或一人の學童が居たが常に記憶力彼れに優れて居た。種々研究して見ると彼れの前額部は凸起して居るを感得した、そして各人相異なれる才能智力は其腦の各部と關係するを察知し且つ記憶に富むものは常に同一の形狀を具有せることを發見した。是に於て外才智の發達如何は頭蓋の外部に見はれて、各特殊の方向に發達したる人々を研究し其顯著なる者に就きて熱心に其心性狀態を鑑査し歸納的に之が統計を作つて見たら果せるかな、其狀態

は甲に就いて乙に見ざる特長あり、乙に就いて丙に見ざる短所あるを悟つた結果、愈々其形狀の大小に就き其性狀を異にせるを確信を見るに從ひ、益々深く研鑽する所あつて、始めて千七百九十六年維也納府に於て公開講演を行つた、時しも墺國は無學者の專政時代で猜忌心深き同國政府は其講義を拒絶した。仕方がないから佛國巴里に居を卜し醫術を業とする傍ら猶其研究を繼續して居た、同氏の著書は今にも遺つて居る又知名の學者も其門下より出て居る。

人相と云ふは即ち骨相に基く腦髓の發達大小に基き之が形狀は外部の顏面に現はれたる人間の形相を云ふのであるから、結局人心觀破術から云へば同一である。

偖て易學と云へば世間では當るも八野當らぬも八野など云つて、全く取合はぬ人が多いが決して馬耳東風的のものでは無い、乃ち市井の大道易者が儲け主義の妄說を吐くから一

般から侮蔑されるのだが、仰も易學は支那先哲の研究せる卽ち宇宙の萬象を本源本位として(大極と云ふ)陰陽兩儀に分ち、更に四像となり八卦を生じ、此に社會百般の事象の變化を現はすので何事も此陰陽交和に基く變化にあらざるなき極めて事實的眞理を含む深遠高大なる學問である。斯界研究者が益進んで其學理と實地の活用とを研讃せば、他日最も貴重のものとして學界に一大權威を振ふ時節あるは信じて疑はざる所である。

二、腦力の作用

腦一般に就いて大別すれば左の如しである。

一、額より後頭に亘つて頭の頂部に横はるは道德に關す。

二、前額に在るは才能に關す。

三、耳の周圍に在るは自衛に關す。

四、後頭に在るは社交に關す。

次に才能に就いても額の上部に位するものは理論的にして、其下部に位するは物質的であるが婦人は男子に比し一概に後頭部が大きい、尙ほ之れを細別すれば左の四十二種類に分類される。

第一大さ　物體の大さ、容積、分量、間隔等を知得す。

第二形狀　物體の形等の認識、記憶、大なる人は兩眼の距離大なり。

第三重量　體の重量の調子を取り、其他一般重さに關する認識。

第四視察　物に對する視察、觀測。

第五記憶　種々の事件、事物、歷史などに關する記憶力。

第六色彩　各種の色別に關する智力。
第七比較　分類、比較、分折等に於ての能力。
第八場所　場所、景色、地勢、方角等地理的に關する智識。
第九秩序　物の方式、順序、整理に關す。
第十時間　時の記憶、時期其他一般時間に關すること。
第十一計算　數理、暗算、考量に對する理解記憶。
第十二音樂　音樂の靈妙、音響等に對する才能を認識す。
第十三想像　想像力、審美、趣味、推理。
第十四人性　性質、愚悲、慈愛の觀察。
第十五理解　物の原理研究、考案、理論等に關すること。

第十六食慾　美食又は一般の飲食物に對する慾心、
第十七摸倣　人眞似したり、物眞似したりする智力、
第十八財政　貯蓄、節儉、金儲など富に關すること、
第十九温雅　雅量あり人に對して機嫌よく愛憎よき事、
第二十仁惠　仁愛心、同情、寛恕、感恩、物の施與等、
第二十一希望　未來に對する樂しみ、又は望み、
第二十二自信　自重、信念、自負等自己の責任を知覺し、權力等に關す、
第二十三秘密　緘默主義、策略秘密に關すること、
第二十四尊敬　崇拜心、尊敬心、服從心、
第二十五破壞　事物の遂行、殺戮慘害、猛烈進擊、物を破壞すること、

第二十六決斷　物に對する決心果斷、勇氣など、
第二十七名譽　人望を好み、賞讃せられ、人に羨まるゝこと、
第二十八愛兒　小供を愛する情念、
第二十九繼續　繼續意思の集注、事物に附着する一般の觀念、
第三十　敵愾　反抗すること、爭鬪を好み、戰を好む、
第三十一愛鄕　住所愛着、戀鄕心、
第三十二生命　生を尊み、死を否むこと、
第三十三友愛　朋友を愛し、交際を好み團體生活を好む、
第三十四良心、　正義、德義、誠實を好む、
第三十五警戒　注意深きこと、

第三十六信仰　神佛又は高遠なる者に對する崇拜的心念、
第三十七滑稽　物の不權衡、嬉笑諧謔に關すること、
第三十八辯說　辯舌に關す、腦量大なるときは眼球を前に突出す、
第三十九鴻大　寬洪、莊嚴、雄大なること、
第四十肉情　色慾、戀慕、
第四十一結婚　男女の相愛心、
第四十二構造　器械等の構造力、細工の巧妙なること、發明、新案などに關す、

性能の多寡は右四十二性の缺損又は充溢に因て鑑査するので、普通頭腦の量は後頭結節間の周圍二十二吋、耳の穴から耳の穴まで十四吋半、眉間から後頭結節迄十二吋、耳朶より耳朶まで直徑六吋であるから此れ以外は低能か危險性を意味するのである。猿は自身の

體に比して腦量は五十六分の一であるが人間の腦量は四十五分の一で三十餘匁ある。

三、體質と性狀

體格及び體質、相貌、動作等を總括して其變化を推斷し以て其の性狀を觀破すべきである。初めて之を發明主唱せし古人は『ドクトル、トマース』氏である、彼は人身四質を說いて曰く、

第一、神經質

▲顏面蒼白なり、
▲眉毛概ね淡し、
▲筋肉弱し、
▲眼瞳四方を見回はす、
▲頭髮鬚髯多くは軟なり、
▲唇深紅なり、

▲身體の容姿を頻に粧ふ僻あり
▲音聲美にして低
▲人中一體に深し

第二、多血質

▲顏面大にして頭蓋大
▲筋肉强健なり
▲血液多量なり
▲服光閃々白球に緣色を帶ぶ
▲音聲勇大
▲齒牙整列す
▲精神智覺常に敏、奸、詭なり
▲身體白くして肥大
▲毛髮强硬鬆粗なり
▲面色紅潮して光澤あり
▲精神淡泊なり

性情は人に接するに心を以てし膽力毅然として磐石の如く、感情强くして深く、豪放磊

落、義俠心に富み、慈愛心ありて硬直、精悍にして果敢なり。

第三、鬱憂質

▲皮膚黑し
▲鼻先尖出す
▲音聲は濁なり
▲骨格一般に大なり
▲眉毛多く黑し
▲筋肉强しとす
に執着の心强し

第四、薄弱質

▲毛髮濃厚なり
▲容貌愁苦の色あり
▲眼光輝なし
▲膽汁多量なり
▲身體長大なり
▲精神喜怒哀樂の情に急にして總べて事物

▲身體弱なり
▲皮膚は白色
▲毛髮軟弱にして下生す
▲眼光鈍にして人に對して腑視す
▲音聲濁なり
▲精神小膽狹量

▲外形下腹部緊張し脂肪多し
▲眉毛淡し
▲動作痴鈍
▲辯舌吃なり
▲齒牙亂生或は斜生
▲容貌は常に睡眠狀態にあるが如し

四、快活質の人

人も羨み吾れも希望する快活の資質は、之れ悉く心臟、肺臟、胃腑、肝臟、腸其他のすべての生活機能の完備せるに基くものにして、其圓滿なる機能の發動に基き資性自ら快活

となるのである。スペルツハエム氏曰く『天性の運動は必ず其骨相の臟器の方位に向つて發動するものである』と誠に其通りである。左に其の稟性を擧ぐれば、

快　活性の人は通じて肉肥え、頰深くして肩大に圓く廣く、揮べて事物に對して感動力强く、且つ熱心である。鼻孔及び肝臟大にして、顏色凞々光澤を帶び威容颯爽、頭髮鬆粗にして光色あり、齒列整然、言語に一種の力を帶び談笑精彩を放つが如く、活氣五體に横溢し、平生滋養質の飲食物を嗜み、衞生に注意し運動を怠らず、寒暑に對し平然として毫も屈せず、而して多くは常に學問よりは實業的の事を好み、思想考量的方面の力よりは智能に依つて活動する方面に趨り、又形而上の快樂と云ふよりも寧ろ形而下の娛樂を欲求す故に此性の人にして抑制的高尙の學問又は道德上の信念なからんには肉情に走り遂に身を亡ぼすことなきを保せず、然れども事に臨み熱心にして精力裕かなるを以て遂には其事業

に成功すべき性格の人である。

五、性質と行相

剛情の人は頭首を强直し、自負心は鼻を高くし後部に反る即ち俗に云ふ鼻であしらう僻がある。又秘密考察は首を傾け、謹愼は頭首を前方に領がせ、名譽を好む面貌は莞爾として微笑を含み、殺戮を好む面貌は暗黑にして非常に嚴肅なる點がある。扨て日常接近する多くの人々に就き、座體、頭首、言語、笑ひ、行爲、眼の六種に對する其行相を熟々觀ずれば、

一、座體

座體は之れを左の七種に區分す

▲人と對座して悠揚泰然たるは度量あるなり
▲相對して膝頭を狹少にするは小膽なり
▲膝頭を開きて對談するもの膽力あり
然れども其程度を超ゆるものは傲慢非禮とす
▲身體を特に震動せしむる人は貧性にして決斷力に乏し
▲對座して特に身繕ひするものは陋なり
▲座して指を組交はすものは內心平安なり
▲對座して手を拱ぬくものは感慨深からざれば思惑の事多し

一、頭首

頭首は之れを左の五種に區分す

▲頭首を直立ぜしめ動かざるもの剛直なり
▲頭首を左右に傾くるもの多思不體裁とす
▲頭を前方に傾かしめるは憂愁とす
▲頭首を無意味に上ぐるものは痴愚なり
▲頭首を前方に少しく向くるは謹愼謙讓の姿とす

三、言語

言語は之れを左の七種に區分す
▲溫和にして皮肉を放つものは奸曲なり
▲音聲高きは直情なり餘り高過ぎるは賤なり
▲音聲の大なるは勇氣を示す

▲音聲低きは巧言令色の人なり、薄志の人
▲早舌の人は小膽にして、急燥の人
▲多辯なるものは實行力鈍し
▲男子にして女音を發するものは淫とす

四、笑ひ

笑ひは之を左の六種に區分す
▲大笑するものは狹量にして慢心あり
▲微笑するものは奸佞を意味すること多し
▲口を開いて笑ふものは剛にして直なり
▲俯して笑ふものは僞なりとす

▲莞爾するものは誠あり
▲笑ふとき眼中沾ふものは柔順なり

五、行僞

行僞は忠孝仁義禮智信を以て說くべきも到底小册子に能く盡す能はざるを以て吾人日常見聞せる數件を强ゐて揭ぐれば
▲人の惡を云ふものは我醜を覆ふものなり
▲妄りに怒るものは膽小にして淺慮なり
▲直言は潔白なり
▲人を褒むるは智にして謙德とす
▲人を攻むるは已れを利せんとするものなり

▲人に諂ふるものは恐るゝ所あるなり
▲我言容れられざるは誠意なきなり
▲人の急を救ふは仁義なり
▲人を引立つるものは徳自ら其身に至る
▲人を憎むものは遂に人に憎まる
▲人を呪ふものは必ず禍其身に及ぶ
▲麁菜は社會を毒す
▲小惠を強ふるは名なり
▲人を利するはやがて己れを利するなり
▲禮を知らざるは禽獸なり

▲平和を破るものは悪逆暴戻なり
▲弱きを虐むるは怯なり愚昧とす
▲強きに組するは義なきなり

六、眼

▲眼光閃々人を射るものは威なり
▲眠れるが如くして人と對談するものは強慢なり
▲目を小くして瞳眼を目尻に行るものは羨望、戀慕なり
▲通行するとき路傍の四邊に眼をくばり時々驚き顧視するは盜なり
▲眼光を對座の人の胸邊に放つは正なり
▲眼光人の頭を見ずして其下部を見るは直なり「尙眼に就いては後に細説す」

六、性質と音聲

怪鳥猛獸の深山幽谷に咆吼する、小兒婦人の艶麗温雅なる音聲、又は怒濤の叫び暴風の唸り大瀑の水聲何れも其性質に適應せぬものはないとは、骨相書にも述べてあるが、實際獅子の大原野に吼叫する、虎の風に嘯く怖ろしき其聲、馬の精悍なる、牛の獰猛なる、猫の謟ぶる聲、鶴の瑞聲、鷄の報告的なる又は鶯の優美なる皆夫々其性質を異にせるを明白に表示するものではないか。

人の面貌並に其音聲動作などは凡べて才智に關するものである。即ち講談師及び俳優等は能く其態度面容を摸倣し眞に其人を見るの感あらしめるは取りも直さず、其人の才智と言語、容貌、動作、音聲に關係するからである。米國邊では俳優は常に骨相學を研究して

技藝向上の資料として居ると聞いて居る閑話休題人間の性狀も其音聲と談話等に依りても略一班を伺ひ知り得らるゝ、乃ち獰猛なる獸類は其聲も猛烈なるが如く、温和なる小禽は其聲も柔順なるが如くで、文明國の人に比して野蠻國の民は言語通じて明瞭を缺き濁聲なり是れ智識の蒙昧なるを證するもの「野蠻國民は咽喉にて談話すること多しと云ふ」一概にして之を盡くせば其音聲の鋭きものは感情も隨つて鋭く又温厚なるものは其性質も温厚で、早舌の人は前掲の如く性急燥である抔兎角言語に關しては重復の嫌ひあれば省略して何事も喜怒哀樂感嘆、驚愕など各々其音聲を異にして夫々感情を表示するのである。

七、顏面の穴所

人心を觀破する顏面の要所を穴所と稱へて居る。今左に其重なる名稱を掲げて之れが秘

訣を述べんに。

イ　天中

天中とは額の最上部を云ふものにして、長上、官錄、地位、階級等に關す。

ロ　交友、兄弟

交友とは左方の眉にして、兄弟とは右の眉を云ふ。友誼、社交、兄弟に關す。

ハ　天庭

天庭とは天中の下部即ち額の中心を云ふものにして、長上の引立氣受に關す。

ニ　司空

司空とは天庭の下部即ち額の最下部を云ふものにして、業務、事業に關す。

ホ　中正

中正とは眉間を云ふものにして、希望、生命に關す。

ヘ　印堂

印堂とは鼻の附け根の處を云ふものにして、重に家族に關す。

ト　山根

山根とは印堂の下部にして鼻の稍高くなりたる所、疾病又は幸不幸に關す。

チ　年上、壽上

年上と壽上は共に鼻の上下を云ふものにして、財産、臨時の運不運、並に養子、妻など家族の事柄にも關す。

リ　準頭

準頭とは鼻の尖りたる所を云ふものにして、財産の得喪に關す。

ヌ　人中

人中とは鼻溝を云ふものにして、子孫の有無、壽命に關す。

ル　大海

大海とは口の事にして、交際の巧拙、度量の大小並に秘密性の有無を知る穴所とす。

ヲ　承漿

承漿とは下唇の下部の窪みたる所を云ふものにして、飲食に關す。

ワ　地閣

地閣とは承漿の下部と頤の上部との間、肉の膨らみたる箇所にして、家屋住所に關す。

カ　日角、月角

日角は向つて天庭の右脇、月角は同じく其左脇にして父母に關する穴所なり。

ヨ　神光

神光とは眉の上部日角、月角の隣を云ふものにして、信仰心の有無を鑑定する穴所なり。

タ　田宅

田宅とは瞼の上部を云ふものにして、田畑、家宅に關す。

レ　男女

男女とは下瞼の下邊を云ふものにして、子孫に關す。

ソ　賊盜

賊盜とは鼻の兩脇の上部を云ふものにして、金錢の事に關す。

ツ　法令

法令とは鼻の兩脇の紋筋を云ふものにして、職業並に脚部に關する穴所なり。

ネ　山林

山林とは額の兩脇頭髮の生へ際の所を云ふものにして、資産に關す。

ナ　魚尾

魚尾とは目尻の外部を云ふものにして、妻妾又は色慾に關す。

ラ　驛馬

驛馬とは眉尻と近き頭髮の中間を云ふものにして、旅行、普請、移轉の吉凶を見る穴所とす。

ム　奸門

奸門とは頰骨の上部を云ふものにして、色情に關す。

ウ　命門

命門とは奸門の下部を云ふものにして、才智の有無に關す。

キ　觀骨

觀骨とは頰骨の所を云ふものにして、世評に關す。

ノ　奴僕

奴僕とは頰の下部肉の稍窪みたる所を云ふものにして、婢僕等使用人に關する緣に關係ある穴所とす。

右の外大海の上邊を食錄と稱へ、（衣食に關す）口角の附近を地庫と稱へ（近所の隱宅等の福を知る所）準頭の兩脇を蘭臺廷射と名付く。（財産に關する穴所）

八、三停と五嶽

顏面を三停と五嶽に分つて其人の心性を讀破することは最も早分りの秘術である。三停とは上停、中停、下停を指すので、上停とは髪際より眉の間、中停とは眉より鼻の間、下停とは鼻より頤迄の間を稱するので乃ち上停は初年、中停は中年、下停は晩年の運命を卜知するのである。右三停共揃つて肉豐かで血色美しく光澤ある者は福德備はり立身するのである。

五嶽とは南額(額)中嶽(鼻)北嶽(頤)東嶽(左の觀骨)西嶽(右の觀骨)を云ふので此五嶽整然として對峙せる人は幸運で成功する。所で三停に疵、痣、黑子、紋理、其他の惡氣あるものは人生の三期中一時的又は永久的に凶運に陷るり、五嶽の内一つでも權衡を失すれば

悲運薄幸と見るべきである。相者は冷靜に且つ淡懷に之を相すれば物の鏡に映るが如く明瞭に分かる。

九、部分的觀相

一 頭

人間五體の中樞たる頭は腦髓の寶庫であつて意志活動の根源を司るところである。

▲頭の圓形なる人

圓形にして肉厚き人は、富貴兩全の大吉相にして衆人に愛せらるゝ、天稟の福德を有す、故に社交に長じ貴顯紳士の眷顧を享け、其後援と同情によりて大に立身出世するに至る、常識圓滿に發達し人心を收攬する妙腕家は多く此種の活動者なり、婦人は俗に所謂玉の輿

に乗ると云ふ誠に目出度き禍相とす。

▲頭の四角なる人

上下稍長く其形方狀の人は、初年の幸運兒なるが、中年の初期より住所を替へ、生計に困難することあり、然れども業務に熱心にして誠實なる者は、知己長上の引立に依り晩年は幸福にして成功す、婦人は四十歳前後より配偶定まり幸運に向ふ。

▲頭の上部廣く下部尖る人

中年頃迄は運氣旺盛なるを以て克く其機を計り守成の心懸あれは晩年は呑氣に世を送るも、餘り腕を振るい過ぐると祖先の遺德も爲めに沒却することあり、投機的の事は此種の人には絶對宜敷からずとす。婦人は晩年孤獨となるも長命な方なりとす。

▲頭の中部尖出し上下方形の人

此種の人は一概に運氣隆盛なるも、華美を好み能く人の爲めに同情を寄すること多きを以て金錢には緣薄し、人の評判は宜敷き方なり、婦人は性狀嫉妬心深きを以て、大いに愼まざれば緣定まり難し。

▲頭の上下方形を成し中部狹き人

即ち繭形の人は中年頃迄は住所不定、業務失敗勝の方にして苦勞多しとするも、中年後より運氣變り幸運に向ふを以て、其時機を見て勇躍を試むれば立派に成功す、婦人は幸運の方にして良緣を得て家庭和合す。

▲頭の上小さく下廣き人

青年時代迄は好運とは云ひ難きも、中年以後は幸運に向ひ、世人の同情と自己の奮勵とに依り大に富貴の境涯に入る、婦人は相當の良緣ありて子孫繁昌すべし。

▲頭上方形を成し下骨張る人

初年は幸運なるも青年時代に入り苦心慘憺を嘗め、諸種の經驗を積み四十歲以降初めて立身の緒を得運氣大に開く、婦人は夫と早く別かる、運性を有す。

▲頭の上中下部揃つて骨肉厚き人

面相上より論ずれば此種の人を最上吉運の人となす、中年の初期より運氣特に隆盛にして同情其身に集まりトン〳〵拍子の成功し後年の初期時代に入れば旭日東天の勢を以て事業に成功し大に名聲を揚ぐ、富貴兩全、不老長壽の人は此くの如き人を云ふ。婦人も幸運にして家に在りては能く内助を盡くし夫の名聲又は事業の發達を補足し、後家となりては其家を再興すべき强き運性を有す。

▲頭の上下細く中部幅廣き人

餘り好運とは云ひ難し中年頃運開けんとして、又蹉跌す而し此人にして始終地味で事に當つて一貫するの精神堅固なれば生活上には別に困窮することなしとす、此種の人の運性は四十歲以後好運なりとす、何事も辛抱して四十を越して旗上げする精神と實行とが伴へば家運繁榮敢へて悲觀するに及ばず向上發展は疑なきものとす、然し細心の注意は周到なるを怠らざること、婦人は放漫性にして萬事緻密を缺き無頓着に流れ爲めに家事に不祥事を引き起すこと多し。

▲頭の上下部圓形にして肉肥たる人

初年より三十歲頃迄は運性備はらず轉々流離の兆あり、三十歲後土地を變へて初めて好運に趣くことあるも、此種の人は通じて四五十歲内外にして家產を得、老後漸く成功の緒に就く、中運の相なり。婦人は初年の後期より中年の中期間に於て夫と別かるゝ者多し。

二、眼

男子は婦人に比して其頭形に就き其人の性狀如何を觀察することは容易とすべきも、婦人は一般頭髮を結ふて居るから、一寸別り難い。且又男子にしても同樣別り難い人が無いでもないから、第一眼の研究を先きにして其の人の性狀如何を見定めることが捷徑と信ずる。

昔より『眼は人心を示す明窗なり』と云ふてあるが此は實に至言である。孟子は

存乎人者、莫良於眸子、眸子不能掩其惡、胸中正則眸子瞭焉、胸中不正則眸子眊焉。

と云つて乃ち人物觀察に眼を主要としたことは明かである、孔子の爲政篇に

子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉瘦哉、人焉瘦哉。

則ち孔子は人物を觀るには肉眼で視て、次に心眼で觀れば具さに其心狀を讀破し得ることを說かれた、以上聖賢の言に徵するも眼は其人の心性を現實に表示する大切のものなることは事實であるが、猶左に其形狀に依り精細に之を批判して見れば、

イ目の細くして長き人は仁慈の心に富み智力あるも、謙讓過ぐるの嫌あり、一概に温和の性格を備へ威風あり萬人に敬はる、尊き相なり。

ロ目の大小に拘はらすイヤに底光りする者は隱險にして猜疑心深く、横着者なり彼の不良少年强盜等の目は何時もギロ〳〵として否に獰猛な凄味を見せて、少しも愛らしい點を見出さぬではないか。

ハ目の大なる人は比較的宏量雅懷の人多し。

ニ目の尖出せる人は短氣で狷癖强く性粗暴の人多し。

ホ目の色人に媚びる如き人は多情淫奔の性に克ち、利慾の念深し。

ヘ目尻の下がれる人は躊躇勝ちにして姑息的なり又色慾發達し女子に溺るゝ傾向あり。

ト三白眼の人には虚言僞行者多し。

チ目大にして突出せる人は家産を傾け妻に薄縁なるも辯舌は巧みなり。

リ目の中に水氣ある人は非常に淫事を好み、男一人、女一人では濟まぬと云ふ相。

ヌ目の瞳上部にある人は氣位高く自負心強し。

ル瞳子の位置低き人は奸謀盗心の兆あり。

ヲ目薄紗を覆ひだるが如き人は商業に失敗し破産す。

ワ白球に班點ある人は百事成就至難とす。

カ瞳黄色なる人は殺伐的のことを好む、死厄あり。雞眼と稱ふ。

眼力朦朧たる人は貧乏で短命なりとす。

タ對話中上見る人は向上心強く時々高慢に傾き萬事人氣惡敷失敗の性格を有す。

レ目尻の圓い人は色慾に付き心配事あり。

ソ二重目の人は苦勞性なるも仁愛の精神に富みたるも又此種に多し。

ツ長談中視力衰へる人は諸事不如意、沈淪落魄す此種の人は養氣を第一とす。

ネ黒目勝ちの澄み切つたる人は目として申分なきもの才能智力發達し勇氣努力共に備はり事業成功して富貴の人となる誠に羨望に値するものなり（子供にして此種のものは必ず聰明にして機智に富むに證するも明白なり。

ナ笑ふとき目が無くなる人は愛嬌ありて同情を表さる、天稟の德性を備ふ、併し男子より女子の方良ろしとす。

ラ目の下瞼の一文字にして上瞼屈曲せる男子は女色に耽る性あり。

ム話中脇見する人は精神常に動揺せるもの、折々邪心の人ありと知るべし。

ウ田宅の末尾に肉多き人は身體必ず強壯にして多くの子供を持ち、家運益々繁昌す。

キ瞳光燦として目底を照らす人はネと相並んで眼目中の眼目とも云ふべき善相にして、性沈毅旦つ剛直にし雄略に富み機智縱横、威容自ら人を壓す、富貴榮達後世に名を貽す榮譽の人は多く此類の人と思ふべし。

ノ目より常に涙出づる人は熱情的の人にして賴甲斐ある人とすべきも、家庭夫婦間に不和を起し易く運命は拙なしとす。

オ話中眼を眠る人は薄情家にして常に人を輕侮す。

ワ目の上下特變の人は虛言を弄する人と見るべし。

カ話中相手の膝計り見る人は性格不良なり、常に相手の心中を搜り之を利用して一計畫初め樣と云ふ腹面黑きもの。

ヨ眼晴涼しく其頭尾正しき人は大に立身出世す則ちネとキとを集めたるもの之を典型的最優秀の目とす。

タ眼瞼の廣き人は貴人の相とす乃ち德望ありて事業に成功し名聲を轟かす、ヨと大差なき目出度き相性とす。

レ眼の圓ろき人は眼前の機智には富むも遠大の事業を計畫する才能なし。

ソ眼の茶褐色なる人は怜悧にして器用の人間なるも、識見抱負の念乏しきを以て之又大事業家たるには不適當の方ならん。

ツ眼の白色部の濶き人は小才あるも事業を經營し之を遂行する大識量なきは遺憾とす。

三、眉

眉は多くの人が餘り氣を付けぬ樣だけれとも決して忽諸に附すべきでない。

イ眉手の吊り上がりたる人は狷癖強く、傲岸不遜の性。

ロ眉毛の下がりたる人は温厚なれども執着心に乏しく配偶者に緣なし。

ハ眉毛の不平均なる人は小才なきに非らざるも自己の手腕に頼り過ぎて却つて失敗を招くの兆あり。又兄弟に腹違ひの人多し。

ニ眉毛の濃くして短かき人は内心誠實なるも大智謀の人とは謂ひ難し。妻を剋し住居に困る。

ホ眉毛の薄くして長き人は才氣煥發、機略縱横、慈愛心深し。其短きは小智あるも小利慾の念に驅られ終生養はば中流以下で暮す人多し。

ヘ眉毛の大にして濃きは頭領性を現はす、寛仁大度、氣慨に富み大德望家、大富豪家の形相を示し名を後世に遺す人多しと知るべし。

ト眉毛外の毛と異なり堅きものと軟きものと交生せる人は不品行を示す。

チ眉毛薄くして無きが如き人は狡獰殘忍なり。

リ眉毛にツムジある人は兄弟融和せず。

ヌ眉毛交互錯綜せる人は嫉妬心あり、精神餘り宜數からず。

ル眉の中絶せる人は家族生計上の下幸則ち兄弟親戚に緣少なく、運命浮沈多し。

オ眉頭の毛他の毛と反對なるは養子に行かねばならぬ相なり。

ワ眉毛の上下に尖頭交叉せるは國法に觸る。

カ眉骨高きは忍耐力ありて剛毅なるも孤獨性。

ヨ眉毛斷絶せる人は謀計機宜を誤まり、榮枯盛衰あるもの。右は兄弟に死別れ左は男の兄弟に死別れる相。

タ眉毛の上に一の文字あるものは生計に追はれ貧苦を示すものと知れ。

レ眉骨高き人は智慮深く果斷に富み財寶を得、嗜好は文學技藝。

四、鼻

鼻は顏面の中心に位し、顏面の品位を高め威容を整齊して居るのであるから、其形狀の高低大小美醜は其人の心理狀態を現はすは當然の事柄である。鼻のことを一名中岳とも云ふ。

イ鼻の中央突起せるを最上とし志操圓滿。常識發達、福德を得ると云ふ上々の吉相なり。

ロ鼻の剛なるは卽ち剛毅なるを示し、軟なるは柔和を示す。

ハ鼻に節ある者は獨立一家を創立するも家運拙なく支持し難し。

ニ鼻の骨著しく現はれたる人は性急なるを示す故に何事にも短氣を警しめ精神の修養に勉むべし。

ホ鼻に皺多き人は妻子に緣薄く浮沈性なり。

ヘ鼻の附け根に階段ありて、尖頭屈曲せる人は、偏狹にして人言を容れず吾儘なり。

ト小鼻の有無不明の人は福德備はらず子供に緣なし。

チ鼻の根元平坦或は窪みたる人に頑固不人情の者多し、一生涯福來らず。

リ鼻に縱筋ある人は他人の子を養育する相。

ヌ鼻常に赤色をなせる人は我慢心强く目下のものを酷使し、上に諂らう氣質あり。

ル鼻の肉附宜敷稍凸狀を呈せるは智慮充滿、博愛厚情、心胸珠を抱く人。

オ鼻長き人は應鷹にして氣平らかなり、壽命長くして一家繁昌す。

ワ鼻短かき人は短氣にして壽命短かし。

カ口に比して鼻特に大なるは家族上の心配絶えず。

ヨ鼻筋立つて高く肉ある人は富貴長命なり。

タ鼻の根元の兩脇廣きは理解力に富み、物に動せず温良雅健の性格の人なり。

レ山根凹狀甚敷き人は臆病にして緣談纏まらず。

ソ鼻柱の廣大なる人は雅懐に富み美術的業務、精密なる仕事を好む、性強剛雄健なり。

ツ鼻の根元に骨現はれたる人は權謀に秀いで智計に富む。

ネ鼻の穴大なるは命長からず、小ならは貪慾。

ナ鼻低きは貴人高位の人と雖ども心性野卑なり顯榮の夢破るゝ期ありと知るべし。

ラ鼻の尖端青色を帶ぶる人は五體に障りあり、赤色の人は射倖心強し投機的の仕事は全然やるべからず。

ム鼻勢雄偉にして兩目の間に喰ひ入るが如き形狀を成せる人は美人を妻に迎ふと昔より傳ふ、又膽力あり金運に富む。

ウ鼻に横筋ある人は往來路上を注意せざれば身體に災禍を蒙むる事あり。

キ鼻梁歪み又は小鼻寂しきは貧乏者と知るべし。

ノ鼻梁太く法令の筋左右に鮮明に表はれたる人は奮闘努力の氣象に富む。

ヲ鼻の孔見ゆる人は金運に緣薄く偶々財寶を得るも多く消費す。

ク鼻梁大にして唇厚き人は決斷力強く自信深し晩年成功の吉相なり。

ヤ鼻が胡座をかいて居る樣な人は福相にして大膽不敵、堅忍不拔の相恰なれども高貴の相

とは言へず、大儲けをすることあるも斯かる人は金錢の奴隷なり。

マ 鼻溝深くして端末尖形をなす人は子孫繁昌、家運振興す。

ケ 鼻の肉硬く締れる人は執着心強く人と和せざるも才能はある方なり。

フ 鼻溝淺くして端末圓狀を呈する人は子孫絶ゆるの相。

コ 鼻頭に班點を認め其色赤黄混色を呈し艶あるものは兇變あるも轉禍爲福の兆あり。

エ 鼻の肉緩るく締りなき人は決斷力鈍きも學術技藝には上達す。

五、額

額は人相學上南岳と名附く、心性を道破する唯一の標準は左記の如しである。

イ 額の前部晴々として面接者に一種の快感を起さしむるが如きは、即ち想像力の發達したるを證明せるものにして、才能あり特に小說家、藝術家、學者、哲學者、宗教家に最も

適當す。

ロ 前額部著るしく凸起せる人は智識の發達せるものにして、卽ち腦量多大なるもの政治家參謀官、實業家、技術家、船員等を初めとして不適當は少もなし、骨相上イと兩々對峙して大吉相美性の範を示すものとす。

ハ 額の迫まれる人は中年以後は運氣を回復するも、初年は惡運次いで到り苦心慘憺多しと見るべし。

ニ 額、濕いありて天中より眉の間眼緣にかけて黄色を帶ぶるときは長上の人に見込まれ立身す。

ホ 天中より鼻にかけて一道の赤色を認め、眼色異變あるものは鬪爭被害の前兆ゆへ警戒自重すべし。

ヘ 右と同じく二條の赤紅色を認むれば裁判上の鬪爭あるべし。

ト 額の左右に肉勃起し光澤を帶ぶるときは兩親の德を享く。

チ 額全面に紫氣磅礴として黃色を帶ぶるときは瑞兆とす、男子は金銀財寶を求め、女子は偉人を孕む。

リ 額に半月形の黃氣ありて、青氣其中心にあるときは父母長上より嫌疑を受くるの疑ひあり。

ヌ 額に黃氣ありて紅氣中心に起るとき而して鼻頭に黃氣あるときは家庭に吉事ありと知るべし。

ル 額扁平なる人は內心猛く他鄕の人となる。

ヲ 額の皮厚裕にして整然たる人は貴き官祿を得。

ワ 額狹少の人は淺心にして餘りに利慾の念深く吝嗇なり、初年苦勞す。

カ 額低く狹きは人と和せず不運の事多し。

ヨ 官錄附近皮厚く肉豐かなる者は假ひ弟と雖も家產を繼ぐべし。

タ 兄弟の中兄の額狹まければ家を繼がす。

レ 官錄に小皺多き人は辛苦の相。但し婦人は福運とす。

ソ 額に小皺交錯せる人は、不幸にして鄕里を去る。

ツ 額の中央鳩胸の交狀をなし橫筋入り亂れたるが如きは狡猾邪智なり。

ネ 額に紋あるものは運命凶なり、且つ又孤獨性を意味す。

ナ 同上婦人にありては夫の爲め心配多き相。

ラ 額に斷絕の紋多きは長上に對し氣象苦勞多し。

ム婦人の額濕潤光澤あるものは願ひ事叶はず煩悶す。
ウ婦人の髪の生へ涯高く額廣過ぎる人は緣變る印と知るべし。
キ婦人の額にハ形の皺あるものは内心嫉妬の情深し怖るべし。

六、口、齒、唇

口は一名大海と名附け、其人の肝ッ玉の廣いとか狹いとか又は秘密的性格の有る無しを見定める標準局部である。

イ口の大なる人は大膽にて、磊落、家財を蕩盡する者あり。
ロ口の大にして一字形を成し口角締りある人は度量ありて沈着、覇氣に富むも深く内に藏す、品格自から備り嶄然として衆人を壓し其性賢をるを示す。
ホ口細く見ゆるも其實大なるは偉人の相、貴族の面影あり。

ヘ口の小なる者は一概に小心翼々の部に屬し破天荒的事業も成し得ず、又大損失の事柄招來せず小なれば小、大なれば大と云つた形。
ト齒並み立派なる人は言語明晰、誠實自から現はれ人を感動せしむ。
チ緣並み惡敷しき人は父母に緣薄し。
リ齒並み善くも空きある人に虛言を放つ、又家族に緣少し。
ヌ左右の齒尖れるものは親類と不和を來す。
ル齒小さく白くとも短かきは長上に位する能はざる運命にして、身體に被害の恐れあり。
ヲ前面の齒三枚變形を成す者は内心邪惡なり。
ワ齒長き人は富貴長命の相。
カ齒は全部直なるを宜敷しとす然れば向ひ合はせの齒二枚の内其一枚著しく屈曲する者は

不幸者にして家族上辛勞絶えず。

ヨ口角上かれる人は貴族的なり。

タ口角下かれる人は下等にして人に疎まる。

レ上唇の出たる人は卑賤にして性燥急なり。

ソ下唇の出たる人は議論好きなり。

ツ口中唾多き人は家族上の不幸あり、世を僞り人を傷ふもの、婦人なれば多淫の特徴なりとす。

ネ口を常に開いて居る人は心中締りなし。愚人啞者は此部に多し。

ナ唇薄き人は辯舌に巧みなるも、往々輕卒に走り虛言を吐くものあり、又奸獰の徒も此部に多しと知るべし。

ラ唇重き人は野卑にして性質粗笨。

ム舌の尖りて小なるは賢き方なれども公德心缺乏の者なり。

ウ舌の大なるは風流韻事の能ありて、何處か餘裕綽々の俤あり。

七、頤及轄骨

頤は一名北岳と名附く、一般の人は敢へて深く意を留めず、輕々に之れを看過するも其實然らず、讀心の要所として大に研究すべき必要部分である。

イ頤圓るく肉豐かなる人は善き家屋敷を得、卽ち財寶に緣深き吉相とす。

ロ頤の肉薄く寂寥の感ある人は住所に不緣、貧相と云ふべし。

ハ轄骨（頤の上部の骨）高く尖出せる者は理屈屋なり、自信强く他と相容れざる傾きありて損することあり、併し斯かる人は自己の職業には熱心にして發展す。

ニ 轄骨の肉少なく骨尖がれる人は社交に拙劣なり、故に一時好調の時あるも忽ち衰微す、可憐の運命と云ふべきか。

ホ 轄骨高からずとも尖れる人は強慾の者と見るべし。

ヘ 頤の肉緊張せる人は智力充實し、觀察力鋭く、彈力性に富む。

ト 頤の肉豐かなるも締りなき人は才能乏しきも福德ある者なり。

チ 轄骨大きく開きたる形狀の人は、利己主義の人にして貪婪吝嗇甚だ感心出來ざる人物なり。

リ 頤屈曲せる相恰の人は疑ひ深く、狐狸性の者大に精神教養の必要あり。

ヌ 頤の骨二分せるは流浪横死の相なりとす。

ル 頤の骨後ろへ引込みたるが如きは、粗忽性にして意地惡しく籠絡的手段を以て處世の要

訣とする凶相。

八、觀骨

觀骨（眼尻の下部の骨）に依り人心を看破する標準左の如し。

イ 觀骨高き人は蓄財の念堅きも、人の爲め思はぬ損失を蒙ることあり、而して一徹短慮事を誤まる性癖あれば大に修養の要あり。

ロ 觀骨高く耳邊に到る人は衆人に仰がれ德望高し。

ハ 觀骨低く無きに似たるは内心狹小、薄志弱行なり、但し眼に力あれば之を補ふ。

ニ 觀骨横に高き人は氣慨に乏しく勤勉努力を厭ふの風あり。

ホ 觀骨平滑なる人は仁德の心備はり幸福なる人。

ヘ 觀骨面の肉光澤ある人は器量人にして師匠肌なり吉。

ト觀骨に黑子あるは劍難の相とす。

九、耳

耳の大小曲直並に其色合垂珠の厚薄等に依り人心を批判すれば、

イ耳聳へて空を衝く形の人は智略あり、臨機應變難關踏破すべし。

ロ耳の低下せる人は聰明ならず。

ハ耳頭に密接せる人は大に名聲を擧げ、社會の模範人物となる相。

ニ耳の位置眼より高きは師匠勝りの特色を認む、則ち之を金耳と稱へ富貴顯達の極上吉相也。

ホ垂珠厚く丸るきは福德多き人にして誠意あり內心餘裕ある人。

ヘ垂珠の小なる人は誠意少きも才智あり、然れども怒り易き人。

ト耳薄くして耳輪の外部に反りたる人は、人と爭ひ易く、命數永からず。

チ左右の耳大小なる人は耳相として忌むべき相にして、邪智に富み奸策を弄し社會を毒する惡漢と知るべし。

リ耳の輪出でたる人は親と同居せず、獨立獨行世を渡るものと見るべし。

ヌ垂珠に黑子ある人は寶を得。

ル耳の孔の小なる人は小心の人なり。

ヲ垂珠に毛多く生ずるときは親類緣者に關係遠さかるときなり。

ワ耳の形狀正しからざる人は內心常に動搖して遣り繰りに窮迫さる。

カ耳の色顏より白きは幸運の人、紅白なるは才覺拔群の兆とす。

十、魚尾

魚尾（眼尻の外部觀骨の上部）は讀心上如何なる標準あるやと云へば

イ魚尾の平々坦々たるは邪心多く、女に對して苦勞多し。

ロ魚尾の紋鬢髮に入るものは、生涯を他鄕に送るもの、又妻を代ゆることあり。

ハ魚尾に紋ありて其短かきは妻をイジメ其長きは和合圓滿蜜の如し。

ニ魚尾の線上部に勢ひあるものは賢妻を得て家運隆興し、下部に流下せる狀あるものは常に何事も亨主に賴よる傾向あり。

ホ魚尾に痣ある人は色慾に荒さむの特徵とす。

十一、法令

法令（口と頰とを境界せる線）は其顯著なる人と、無きが如き人、直線を成すもの、屈折せるもの、長きもの、短きもの十人十色とも云ふべきである。然れば其處に何者か異な

れる心性を洞察する深き意味が無ければならぬ。

イ法令長くして地閣に及ぶ人は萬歲の壽を保つ。

ロ法令腮に及べるもの又七八十歲の壽命あるものとす。

ハ法令短きは命數餘り永からず、然れど攝生上の注意を怠らざれば案外長活すべし。

ニ法令の切れたる者は病身に非ざるは身體弱し。

ホ法令廣き人は商賣繁昌す、勤人なれば立身す、多數の人を使用すべき、誠に結構の相なり。

法令狹き人は業務の範圍狹少にして萎微甚だ振はずと云ふ相なれば、斯かる人は大に何者も開發的思想を以て鋭意事に當るべし。

ト法令曲れる人は、則ち巧に處世の難局を乘り切り、禍を轉じて福となす力量ある人。

チ法令に小筋多く出でたる人は思想發達の結果、同一の職務に甘んずるを避け種々の業務にたづさはる傾きあるを以て選擇宜敷を得其一に向かつて進まば他日大成すべし。

リ法令單純なるは無能無藝を示すものなり。

ヌ法令に黑子ある人は身體の下部に患ありとす。

ル法令曲折して口邊に至るものは常に生計の苦勞絶えず、法令の相として最惡の部とす。

十二、印堂

印堂（兩眼の間を云ふ）も猶其人の性格、運命身體の强弱を卜知する穴所なりとす。

イ印堂廣き人は五體强健にして精力あり、又性格寬大の方にして清濁併呑の雅懷に富み、人の頭に立つと云ふ羨むべき相なるも、餘り廣過ぎたるは茫漠として才能乏しき方なり而して蓄財に案外拙なき處あり。

ロ印堂に小皺多きは性質善良ならず、處世上順逆交々到り、終生を完ふする能はず。

ハ印堂狹き人は五體羸弱のもの多し、性質克己心乏しく他人と衝突し易し、長上並に同僚間に不和を釀す兆あり。

ニ印堂に八の立筋ある人は猜疑心深く嫉妬心多し、結局吉運の方に非らず。

ホ印堂に針の如き紋筋ある者は家族圓滿ならず、祖先を敬まはず、妻を剋し、父母に孝養心乏しく、我子を傷ふ實に厄介至極の相とす。

ヘ印堂に種々の紋筋亂交せる者は運命全からず大厄難に遭遇す。

ト印堂に菊石多き男子は實家を繼がず養子に行くと云ふ相、女子なれば同じく養女に行く相と知るべし。

十三、人中

人中（鼻下口に至る縦の溝）は人物觀察上左記の特色がある、讀者は或は意外とする所があるやも知れぬが、實際百人百色興味湧くを禁ずる能はざるものあるに一驚せん。

イ人中の長き人は將に長壽正福の吉相。

ロ人中の短き人は薄命悲運憐むべきなり。

ハ人中締りなき人は性情放漫にして守成の心乏しく決斷力なしとす。

ニ人中の上部狹くして下部廣きは子供外く家運榮ゆる人と見るべし。

ホ人中淺くして狹きは子孫に乏しく、他人に吾家を讓るべし。

ヘ人中平坦にして淺薄なるは同じく子供に緣薄きも社交には如才なく、衆人に愛せらるゝものあり。

ト人中の端末氣力滿ちたる人は金銀財寶を得る人、正に富豪家となる吉相なれどもトント

ン拍子に巨萬の財を積む側の人とは認め難く、乃ち成功の途波濤重疊を突破して初めて富貴の人となると云ふ方なるべし。

チ人中平靜なる人は子孫多しとす。

リ人中糸の如くして精力に缺けたる面持ちある人は子孫全く無しとす、（身體の强弱に限らず）

ヌ人中に二ツの横紋ある者は非常の相と見るべし但し婦人なれば出産上患ひあり。

ル人中同上のものにして婦人に黑子あれば、二子を生むべきの相とす、併し體には故障なし。

ヲ人中曲折せる人は至誠篤實ならず、信望淺き證とす。

ワ人中暗く灰色を帶ぶるものは不德不義、薄情淺識の人なり。

カ人中暗黒色のものは家事の苦勞あり、體質弱き方。
ヨ人中赤紅色を呈する人は家族親戚の苦辛あり子供の養育に注意すべし。
タ人中に無毛の人は才幹ありて正に活動界の人物なるも、事業の成功は疑問とす。
レ人中多毛なれば智力には欠けたる側とすべきも、安心立命の未來ある賴母しき相とす。

十四、毛髮、鬚髯

毛髮は男女共常に生へ變るものであるから其人の精神上の變化は盡く之れ肉體上に變化を及ぼす結果運命吉又は凶なるとき、志氣の振興せるとき或は消沈せる場合其人の心性を看破すれば歴然と手に取る樣に判かることは當然である。又本來原質の細大、强軟並に色合等に依りても其人の現在未來を看取することが出來る。昔より『怒髮冠を衝く』とは其人の精神亢奮せるときを形容せる文句なるが、こは露骨の場合であるから誰しも判かるこ

とだが、一般の人がチヨト心付かぬ看破法上重なる點を摘示すれば、

イ毛髮極めて密なる人は性緻密にして何事に當つても用意周到、博愛仁義の心情に富む。
ロ毛髮極めて疎なるは其人の性質雜漠を語るもの、偶々智能あるも多く公益公共を無視し人道を蹂躙す。
ハ毛髮薄くして風に靡くが如きは志操堅固ならず、難局に際して直ちにへタ張る人。
ニ毛髮黑漆にして質實强剛なるは性又剛健百折撓まず千挫折せざる有望有爲の人とす。
ホ毛髮細く柔かきは同情心に富み大に談ずるに足るの人とす、成すこと又精密を極め奇麗好きのたちなれば、斯かる婦人を迎ふる人は内助の功をあげ、家運日々昌隆すべし。
ヘ毛髮全部赤き人は性質英敏にして執拗の心多く、狐獨性を表はすを以て家族は一概に少なき方なるべし。

ト　口髭赤き人は事業發展の見込少なし、事に當つて苦心經營の方なれば人一倍の注意と努力を傾注する覺悟を要す身體も餘り強き方にあらず。

チ　地閣に髭なき男子は身命に關する變事あり。

リ　男子にして胸邊に毛多きは内心弱くして外見強なるを示すもの。

ヌ　山林、驛馬の上部毛髮亂雜なる人は信實心なく虚事を好み、人をアヤ釣る油斷のならぬ人間なるも、才能なき方に非ざれば、教導次第役に立つことあり。

ル　陰所附近生毛の特に濃厚なるか、又は薄淺の人は色情の念強し。

十五、首

首は頭の附け根なれば、猶心相觀破上見逃す能はざる有意味の箇所なりと云ふべきである。

イ　首筋は大なるを宜敷とす、身體强健無病にして思想高大、手腕拔群、音樂の天才あり。

ロ　首筋小さき人は身體弱にして、終始一貫の氣慨に乏しく、貧弱を示す。

ハ　首筋小なるも緊縮せるは、忍耐力ありて、勇氣あり。

ニ　首筋長く延びたるは向上發達の觀念强く晩年實現すべきを示すものとす。中年と雖も衣食に窮することなく、餘裕綽々心胸閑日月の俤ありとす。

ホ　首筋青筋多き人は性急躁にして些事にクヨ〳〵する損の方なり。

ヘ　首筋肉多く色白きは福運の人にして、德義心あり。多くの人を統御する貴相なり。

十六、痣、黑子

痣と黑子は其所在に依りて各々運命を異にするも、其何れにあるを問はず、大部分は凶運性のものと見れば大差はない、痣と云ひ黑子と云ひ共に顏面に在れば則ち顏面美を損な

ふ。花をも羞ぢらう美人の顔に其一あれば、實に玉に疵であると、誰しも惜しみ同情する扨て其れが心性に關係を有すると云へば、一寸不思議に思はれるが、左記の特徴を考慮すれば決して默過すべきに非ずと謂ふべきである。

イ食祿にあれば住居に關係あり、常に漂然として東西南北、水草を追ふて移轉する兆あり

知己緣者の同情薄し。

ロ法令にある者は家業と異なる職業にたつさはる、兩親に反する意志あれば特に意を此處に留めて孝道に悖らぬ樣心懸くるが第一なり。

ハ黑子口角にある者は父母に生別ると云ふしるし、兎角吉ならず。

ニ命宮にある人は家產を傾け、他人と爭事あり、平穩無事に世を渡るものとは受取難し。

ホ天中にある人は先輩長上の引立てなし、立身困難の方。

ヘ驛馬にある人は苦勞性にして度々心居を變へ、窮する事あり。

ト官祿にある人は好事魔多しと云ふべき相なれば、事に臨むで細心の注意を要す。

チ觀骨にある者は衆人の意表る、の兆、人心を收纜する能はず、何れかと云へば社交に迂拙なり。

リ黑子山林にある者は財寶身に收め難く、偶々獲る所あるも多くは散ずる性格なり、又婦人に惱まさるゝ恐れあり。

ヌ邊地にあるものは旅行難あり、かゝる人は必ず傷害保險を附する必要あり。

ル準頭にあるときは衣食住の困難あり。

オ田宅にあるものは常に人の厄介を見るべし、但し人の厄介にならぬが其人の德。

ワ承漿にあるときは食物の爲めに思はぬ病氣を求むる兆あり、攝生が何より肝要。

カ法令にある人は兩親に緣薄し、其左にあるときは父と早く別かれ、右にあるときは母と早く別れる。

ヨ兄弟にあるときは緣談纏まらずと知るべし、假令ありても又離緣することあり。

タ子孫にあるときは子供に苦勞多し、かゝる人は子供至つて少なき方。

レ眉頭に黑子ある人は不慮の災害來ることあれば平素謹直の修養怠らぬこと。

ソ淚堂にあるときは自分の部下に心配事多く統御に困難す。

ツ魚尾にある者は色慾熾んなり姦ましき事柄は必ず避くること。

ネ地閣にある者は住居不定中部にあるは凶。

ナ黑子喉にある者は、賊心多し、かゝる人には敬遠主義が上分別。

ラ黑子耳の後ろにある者には凶惡性のもの多し。

ム淚堂に痣ある者は男女を通じて嫉妬心强く、家庭の圓滿を欠くこと多し。

附錄

觀相秘傳

終

世の中に心あり明けの人はみな
かくて闇には迷はぬものを

大正十二年五月九日印刷
大正十二年五月十二日發行

著作者　德永順二
發行者　吉河金藏　東京市下谷區上野櫻木町五二
印刷者　松田新治郎　東京市芝區西久保廣町三十二
印刷所　松田印刷所　東京市芝區西久保廣町三十二

不許復製

定價壹圓五拾錢

發兌　東京市下谷區上野櫻木町五二
振替東京六〇四六八番　好文社書院

291
446

終